

有識者からいただいたコメント

〔国語〕

◆ロバート・キャンベル氏（国文学研究資料館長、中央教育審議会教育課程部会委員）

「国語」では、従来のように受験生が教室で学んだ基礎知識の程度を計測するだけではなく、さまざまな題材を与え、整理させ、その過程で深められた思考の形跡を浮き上がらせることによって、受験生が主体的に何を学び、考えたかを試すことができることに最大の特徴がある。

この特徴を、設問に用いられた素材と解答方式の重層化から読み取ることができる。既発表の論説などを一元的に読解させるのではなく、ある素材を俎上へのせ、その素材をめぐる人びとの議論や問いかけを重ね、受験生にその議論などを含み込んだかたちで、素材の意味を考えさせるようになっている。読み解くために深められた思考の過程が見えるようにすることで、受験生一人ひとりが積極的に学ぶことの手ごたえや重要性を実感できる試験にはなっているように感じた。

設問の素材に図表や写真が含まれ、文章とともに、それらが的確に理解されているかどうか、あるいは文語表現が「単語」としてだけではなく、文脈の中で十分に読み取れているかどうかなど、記述式や複数選択の解答が導入され、主体的な学びを測る効果に重点が置かれている。これらの点は、高く評価したい。

多角的に、自ら考える力を問うという改善点とともに、従来の試験と比べて情報量がかなり増えている。時間も伸びているが、受験生が解答するのに負担が大きすぎないか、が課題として浮上するかもしれない。また素材の重層化にともなって、毎年、安定した高品質の素材と作問をどう担保するか、試験作成の仕組み自体に対し強化や工夫が必要であるように考えている。

〔数学〕

◆小谷元子氏（東北大学大学院理学研究科教授、総合科学技術会議議員、中央教育審議会教育課程部会算数・数学ワーキンググループ主査）

大変に楽しく解かせていただきました。日常の問題を、自然な試行錯誤の中から、徐々に正解に近づいていく設定は、数学による問題解決の手法を学ぶことにもつながります。これまでの公式を使って正解を求めるという形式に比較し圧倒的に、自立した考えや発想を促す良問です。中央教育審議会の算数・数学ワーキンググループで議論した方針にも良く沿っています。数学は科学の基礎であるので、できれば自然科学や生命科学などに通じる問題もあると良いと思います。実施に向けて、解答形式について工夫いただけますと幸いです。

〔地理歴史、公民〕

◆田中愛治氏（早稲田大学政治経済学術院教授、中央教育審議会教育課程部会高等学校の地歴・公民科目の在り方に関する特別チーム主査）

大学入試センターが作った新しいタイプのサンプル入試問題は、嬉しい驚きであった。学習指導要領の見直しの過程で、地歴・公民の分野での特別チームでの議論は、高校生にいかに考えさせるか、どう考えさせるかということをも最優先課題としていたのだが、今回のサンプル問題はその精神を大変良く具体化している。

論述式でなく、客観形式の問題でありながら、これほどに受験生に考えさせる問題を作ることができるのかという驚きと、作題に携われた先生方のご苦勞が想像できた。受験生に思考の大切さを教えることができる良い問題を良く練り上げられたと感服している。

例えば、基礎知識を必要とする問題でも、直接それを問うのではなく、その知識を基に考えて答えるように工夫された問題など、非常に工夫が行き届いて、受験生に考えて解くことの重要性を分らせる良問を作られたことに敬意を表したい。

◆古城佳子氏（東京大学大学院総合文化研究科教授、中央教育審議会教育課程部会高等学校の地歴・公民科科目の在り方に関する特別チーム委員）

高等学校の学習指導要領の改訂が2022年度に行なわれる予定であるが、科目の改編は別にして、この改訂に向けて現在の高等学校の学習で習得することが期待される能力について、プレテストは問う内容になっていると感じた。特に、資料から読み取った情報を基にして考察する力、情報を基にして比較や関連づけを行なう力、現代社会の課題と結びつけて考える力を問う姿勢は顕著である。問題文の形式も、史料、図表、グラフなどの情報を中心に据えて生徒間での討論であったり、テーマに沿った学習発表であったりと高等学校で今後期待される学習のあり方に沿っている点は、問題文にも工夫がなされている。また、問題文や資料をきちんと読まなければ解答できない工夫もなされている。

用語や年号の記憶に偏る傾向が強かった社会科学習を変えようとする姿勢は評価する。思考する前提として知識の習得が重要であるのは言うまでもないので、知識がなくとも解けてしまう問題ではなく、知識の理解力、活用能力を問う問題を今後も工夫してもらいたい。

〔理科〕

◆大島まり氏（東京大学大学院情報学環、生産技術研究所教授、中央教育審議会教育課程部会委員）

今回の試行テストは、今までの入試問題の傾向と異なるため、戸惑いを感じる人が多いのではないかと思います。しかし、次期学習指導要領を視野に入れ、「知識の量」から「知識の質・深み」を問う問題への方向性を模索した取組であり、その第一ステップとして評価できるのではないのでしょうか。各単元で習得した基礎的知識を問うだけでなく、横断的な問題もあり、これらの問題を通して内容を読解し、知識を組み立て考える能力も問われています。

全体として、様々な挑戦的な試みがなされていて、熟考された良い問題と言えます。一方、説明文が比較的長く、問題が多いと感じられるなどの、課題も見られます。試行テストの結果を分析、検討することで、具体的な課題を明確にし、思考力や判断力等も評価できる、より良い問題の作成へと改善していただきたいです。そして、新しい時代に必要となる資質・能力の育成へとつながる、そのような入試改革となることを期待しております。

◆塩瀬隆之氏（京都大学総合博物館准教授、中央教育審議会教育課程部会高等学校の数学・理科にわたる探究的科目の在り方に関する特別チーム委員）

試行テスト受験者の多くは、まず設問文の長さに躊躇し、全選択や該当なしの選択問題に戸惑われるかも知れません。しかしそれは、深い読解力を必要とし、状況を分析する思考力、そして消去法でない確かな判断力を問うための新たな作問指針によるものです。

設問文が長い、選択肢が複雑すぎる、といった消極的な声上がることも予想されますが、まさに「急激な社会変化の中でも、未来の創り手となるために必要な資質・能力」を問うことに挑戦するメッセージがこめられた作問と受け止めたいと思います。「これまでの暗記中心の勉強では通用しない」という声上がることを歓迎し、試行テストの点数や難易度は一旦わきに置いて、思考力や判断力の習得度を問う内容かどうか精査すべきです。

全数選択と該当なしを組み合わせると極端に難易度が上がり、長い設問序文も受験生に敬遠されたりする恐れがあります。しかし、設問形式ごとの偏りを分散させるなど工夫の余地が十分に残っており、結果の点数だけに着目してせっかくの挑戦に対して否定的な判断が下されることは避けるべきです。教育関係者の皆様におかれましては、本丸の入試改革を後押しするような建設的な議論につながる新テスト試行の分析、検討を期待しております。